

Overview

岩井 武尚^{1,2,3}

さて、過日「脈管学」編集会議におきまして、編集委員長の太田 敬先生はじめ、各編集委員の先生方から「脈管学」誌上に特集を企画するようにとのご意見を頂き、編集の大役を仰せつかりました。その後、執筆者を選び執筆をお願いして9カ月が経ちました。皆様には多忙このうえなく、かつ執筆者は円熟期の方々ばかりで時間の調整が難しいなか「静脈疾患－新たなる展開」という特集として執筆いただき心よりお礼申し上げます。さらに、日本静脈学会を代表してこの特集が学会活動の一部となり、若い人々が静脈学への興味を深くしていただければと思うところであります。

静脈疾患は、静脈瘤を含めると極めて日常的な疾患です。脈管学を志すものにとって静脈疾患の知識、理解、応用は重要な部分を占めているわけですが、実際にはまだまだ不十分といわざるを得ません。わが国では、硬化療法の普及した1990年ころから静脈に対する興味が、急に増大し今日に至っています。そしておよそ5年周期で新しい変化が生まれております。今回多分に教科書的題目で執筆をお願いすることになりましたが、最近の新しい話題をも取り込みながら執筆をお願いいたしました。基礎的な解剖、病態についてもトピックスを論じていただけたと確信しております。そんなわけでテーマ「新たなる展開」を十分感じ取っていただきたいと思います。

世界的にみると静脈学にどっぷりと浸かり、造詣深く、膨大な知識・経験をいかして活躍されている方を数多くみます。その方々は静脈の面白さ、手近さ、アウトカムのきれいさなど静脈の魅力にのめり込んでいる人たちです。しかし、現実では、静脈の疾患だけに慣れ親しんでばかりではられません。また、動脈疾患のみを追いかけても血管学・脈管学は行き着きません。たとえば、膝窩動脈外膜嚢腫を診断・治療できても、大腿静

脈の外膜嚢腫も診断・治療できなくてはなりません。静脈性の大出血も静脈の原理を知って、ちゃんとコントロールできなくてはなりません。「いつも頭の片隅に静脈を！」が脈管学を究める人に必要でしょう。そして、「静脈を制するものは動脈を制する」との言葉どおり、本当の専門医に求められているのは、こんなキャッチフレーズの行動といえるでしょう。

小櫃由樹生先生には解剖をお願いしました。下肢静脈に多くのvariationが存在すること、上肢と下肢は大いに異なる静脈形態であることなどを強調していただきました。病態生理の項は割愛しましたが、症状・合併症・鑑別診断など思い出していただければと思っています。石橋宏之先生にはCEAP分類を中心に解説いただきました。CEAP分類が最高の分類とはいえない点をも指摘しながら、日常の診断から得た知識を加味していただいたと思います。菅野範英先生は機能検査の項を担当され、無侵襲的診断法の進歩とCVT(血管診療技師)との役割分担の重要性を強調していただきました。小野滋司・松本賢治先生は画像診断を担当され、古くはなつたが静脈撮影の重要性、さらに超音波診断の手軽さ、再現性、ますますよくなる正確さを述べられました。今は一般的でないMRV, CTangiographyにも言及されました。平井正文先生には静脈機能不全に対する保存的治療法を、日常生活指導がいかに重要であるかを強調して述べられました。特に圧迫療法は、先生自身の多くの研究実績をふまえてわかりやすく述べていただきました。八巻 隆先生には、下肢静脈瘤硬化療法のうちフォーム硬化療法に焦点をあてて歴史にも言及されました。ヨーロッパに学びながら、わが国流のあり方も検討しているようです。小川智弘先生は静脈瘤の手術を担当されました。ここ最近選択肢が大きく膨れ上がった手技についてわかりやすく解説され、戦略とも呼ぶべき現状の組み合わせに長所短所を挙げて解説されています。広川雅之先生は、まだ保険診療されていないレーザー、ラジオ波による本幹静脈治療について述べ、種々のその他の治療法の組み合わせ

¹つくば血管センター

²日本静脈学会理事長

³東京医科歯科大学名誉教授

により日帰り治療が可能であると結んでいます。中野 赳先生には深部静脈血栓症・溶解療法・IVCフィルターについて多くの疑問点が残されていることを指摘され、今後の研究に期待を投げかけました。佐藤 紀先生は深部静脈血栓症の手術について注意深い適応・検査・術式・術後の対応を述べ、依然クリアすべき高いハードルがあることを強調されました。

以上の論文で静脈疾患のすべてを網羅できたわけではありません。また静脈疾患は、発生機序まで含めると何もわかっていないことに気がつくかもしれません。しかし、今後は治療というドラマのなかでひとつひとつが解明され、理解され、実践されていくのであろうと期待し

ております。

17世紀、静脈弁が発見されて静脈学の歴史が変わり、20世紀後半、ドプラの血管への使用により大きく進歩した静脈学は、超音波機器、CT、MRIなどの発達とともにコメディカルの必要性を生み、静脈の専門医を生み、さらに何かを生み出そうとしています。究極は患者に最も喜ばれる地点にたどり着くわけですが、これからも道(みち)に迷うことなく、未知(みち)なる分野に挑戦してほしいと思います。

読者のみなさまには、通読していただき、静脈学の懐の深さを少しでも痛感していただければ幸甚です。